

第1章 はじめに

1.1 不定方程式

中学校で2次方程式の解の公式を学び、整数や有理数でない数、すなわち無理数を導入し、さらに高校では、すべての2次方程式が解をもつように、数の範囲を複素数にまで広げていった。ここでは、素朴な立場に戻り、方程式の解の範囲を整数に限定して、解の存在やその解き方に着目してみよう。

たとえば、3次方程式

$$x^3 - 3x^2 + 5x - 6 = 0$$

を解くことを考える。高校の【数学II】では、解の候補として、定数項の約数 $\pm 1, \pm 2, \pm 3, \pm 6$ がとれることを学んだ。実際、この場合 $x = 2$ が解であることが確かめられ、さらに整数解は $x = 2$ だけであることが確認できる。一般の整数係数 n 次代数方程式

$$c_n x^n + c_{n-1} x^{n-1} + \cdots + c_1 x + c_0 = 0 \quad (c_k \in \mathbf{Z}, c_n \neq 0)$$

の整数解も、 $c_n = 1$ のときには、定数項 c_0 の約数（それは有限個である）をチェックすればすべて得られる。 $c_n \neq 1$ の場合も、この方法を少し修正すればすべての整数解を決定できる（考えてみよう）。ただし、この方法の正当性の証明は高校数学の範囲外であり、今後の代数学の講義で学ぶはずである。詳しくは、「ガウスの原始多項式の理論」という、意外と深い数学的考察を必要とする。

次に、 a, b, c を0でない整数として、2変数の1次方程式

$$ax + by = c$$

を考えよう。【数学A】で学んだように、この方程式が整数の組 (x, y) を解としてもつための条件は、 c が a, b の最大公約数の倍数となることであった。また、実際に解を求めるには、ユークリッドの互除法が有効であった。

以上のように、ある方程式について、その整数解を問題にしたいとき、その方程式を不定方程式またはディオファントス方程式と呼ぶ。解の範囲を狭めて自然数解を問題にしたり、逆に範囲を広げて有理数解に着目することもあり、その場合も不定方程式と呼ばれる。

数学、とくに代数学に属する分野、数論、代数幾何学、表現論などの研究を行うと、問題が不定方程式に帰着することが頻繁にある。それにともない、不定方程式の解法にも様々なアプローチがあるのだが、初等整数論は、そのどれにも共通な基本的な手法になっている。

1.2 ピタゴラス方程式

古典的な不定方程式のひとつの例としてピタゴラス方程式を取り上げる。これは、直角3角形の3辺の関係を表す方程式

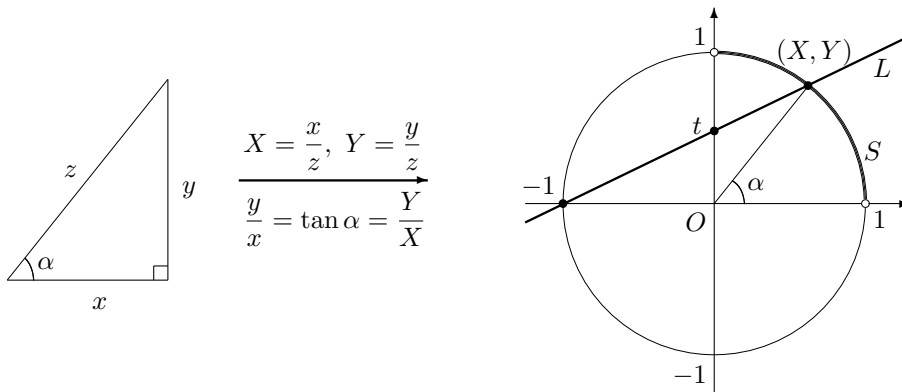
$$x^2 + y^2 = z^2$$

で、とくに辺の長さが自然数であるものに着目したものである。古代から $(x, y, z) = (3, 4, 5)$, $(5, 12, 13)$ などの解が知られており、一般の自然数解の求め方も解明されていたらしい(ネットで調べてみよう)。

ここでは、自然数とは一見関係なさそうな幾何学的な解法を紹介する。ピタゴラス方程式の自然数解を求めることは、

$$X^2 + Y^2 = 1$$

の正の有理数解を求めることと同等であることに注意する。実際、 $x^2 + y^2 = z^2$ の解 (x, y, z) から $X = x/z$, $Y = y/z$ とすれば $X^2 + Y^2 = 1$ の解が得られ、逆に、 $X^2 + Y^2 = 1$ の解 (X, Y) を通分して $X = x/z$, $Y = y/z$ と表わせば $x^2 + y^2 = z^2$ の解が得られるからである(くどい?)。このようにして、ピタゴラス方程式の自然数解は、原点を中心とする半径1の円周 S の上にある、正の有理数を座標にもつ点(つまり第1象限にある点)と対応付けられることになる。いま、 S 上のそのような点 (X, Y) と点 $(-1, 0)$ を通る直線 L を考えよう。このとき、下図を見れば、 (X, Y) は L の Y -切片 t ($0 < t < 1$) と1対1に対応することがわかる。



直線 L の定義式 $Y = tX + t$ から

$$t = \frac{Y}{X+1}$$

が得られるが、さらに $S: X^2 + Y^2 = 1$ と連立させれば、簡単な計算により

$$X = \frac{1-t^2}{1+t^2}, \quad Y = \frac{2t}{1+t^2}$$

が求まる。これらの式から、 X, Y がともに有理数であることと t が有理数であることは同値であることがわかる。そこで、 t に有理数を次々と代入すれば、 $t = \frac{1}{2}, \frac{2}{3}, \frac{1}{4}, \frac{3}{4}, \dots$

の値から、対応する円周上の点

$$(X, Y) = \left(\frac{3}{4}, \frac{4}{5}\right), \left(\frac{5}{13}, \frac{12}{13}\right), \left(\frac{15}{17}, \frac{8}{17}\right), \left(\frac{7}{25}, \frac{24}{25}\right), \dots$$

を經由して、ピタゴラス方程式 $x^2 + y^2 = z^2$ の解

$$(x, y, z) = (3, 4, 5), (5, 12, 13), (15, 8, 17), (7, 24, 25), \dots$$

が得られ、さらにこの方法ですべての解が得られることになる。

1.3 フェルマーの最終定理

ピタゴラス方程式は2次式で表されているが、これを3次にするとどうなるか？フェルマー（17世紀の人）は、そのような方程式には自然数解がなく、さらに4次以上でも同様に自然数解がないと述べている。さらに、ある本の余白に、「その『驚くべき証明』を発見したがそれを記すにはこの余白は狭すぎる」と書き残した。現在まで彼の証明は見つかっていない。

定理 1.1 (フェルマーの最終定理) 自然数 $n \geq 3$ に対して、方程式

$$x^n + y^n = z^n$$

は自然数解をもたない。

この定理は、長い間証明が知られていなかったもので、かつては『フェルマー予想』とも呼ばれ、整数論における難問のひとつであった。フェルマー自身によって $n = 4$ の場合が証明され、 $n = 3$ に対してはオイラーが証明を与えている（それぞれ、17, 18世紀）。その後、ソフィー・ジェルマン、ディリクレ、クンマー等の貢献により、19世紀中に100までのすべての n に対して正しいことが確かめられたが、20世紀になって整数論や代数幾何学の理論が少しずつ整えられた結果、1994年ワイルズによって完全な証明が与えられた。その証明は数多くの高度な理論を駆使して構成され、大胆な発想に満ちているが、その概略の一部だけでも紹介するにはこの余白は狭すぎる（なんちゃって）。

1.4 有名な問題

一般に数学の問題は難しい概念を用いて語られ、専門に学んだ人でなければ問題を理解することすら困難であることが多い。しかし、整数論の問題は初等的に表現されるものもあり、それらの多くは中高生でも（小学生でも？）理解できる。ただし、問題が初等的に表現されるからといって、必ずしも初等的に解けるとはいえず、未解決のまま残ることも往々にしてある。前述の『フェルマーの最終定理（フェルマー予想）』も20数年前まではそんな類の問題であった。他にもいくつかあるので思いつくままに列挙してみる。

● 素数が無限個存在することは古代から知られているが、 $(3, 5), (5, 7), (11, 13), (17, 19)$ のように差が2である素数のペアも無数にありそうである。このようなペアを双子素数という。計算を続けていくといくらでも大きなペアが見つかる、たとえば $(20161019, 20161021)$ など。Maple を使ってもっと探してみよ。

予想 1.2 (双子素数予想) 双子素数は無限組存在するであろう。

双子素数は差が2である素数のペアであるが、2013年、差が7千万以下である素数のペアが無数にあることが Y. Zhang によって証明された。“2と7千万”では雲泥の差があるようだが、この証明以前には“2と無限大”であったのだから、画期的な結果と言って良いであろう。その後すぐに改良が進み、7千万が246に置き換えられることがわかった。いずれ、近いうちに246が2に改良され「双子素数予想」は解決されるのだろうか、それとも、新たな問題が出てきて未解決のままになるのだろうか……。

● その数より小さい約数の和がその数になるとき完全数という。たとえば、28はその約数 $1, 2, 4, 7, 14$ の和と等しいので完全数である。 $2^n - 1$ が素数のとき $2^{n-1}(2^n - 1)$ が完全数となることは古代から知られていた。さらにオイラーによって、偶数の完全数は必ずこのように表されることも証明されている。

予想 1.3 偶数の完全数は無限に存在するであろう。

この予想は、 $2^n - 1$ の形の素数が無数にあるだろうということと同じである。このような素数はメルセンヌ素数と呼ばれ、巨大な素数の例として興味深い。現在(2016年9月)までに49個のメルセンヌ素数が見つかっていて、最大のもは $2^{74207281} - 1$ であるが、これが現在知られている最大の素数となっている。なお、奇数の完全数は一つも発見されていない。

予想 1.4 奇数の完全数は存在しないであろう。

● 次に紹介する予想は少し風変わりである。自然数 n が偶数ならば $n/2$ とし、1より大きい奇数ならば $3n + 1$ とする操作を考える。たとえば6から始めてこの操作を繰り返しほどこすと、 $6 \rightarrow 3 \rightarrow 10 \rightarrow 5 \rightarrow 16 \rightarrow 8 \rightarrow 4 \rightarrow 2 \rightarrow 1$ のように最後は1となって止まる。少し計算を試してみると、どんな自然数についても操作を続けると最後は1に到達するようである。Maple を使って実験してみよ。

予想 1.5 (コラッツの予想) すべての自然数は、この操作を繰り返しほどこすことで必ず1になるであろう。

この予想は $3n + 1$ 予想とも呼ばれる。整数論には、どうやってアプローチしたらよいかその糸口すら見つからない問題がよくあるが、この予想もそのような類の問題のひとつである。